

核武装と北朝鮮

市川 浩

市川 浩

北朝鮮の核武装問題は今や最大の国際問題となり、國連を舞臺に連日各國の立場よりの論戰深刻度を増す。過去數次の國連制裁決議にも、強硬姿勢を崩さず時に核實驗、彈道彈發射を繰返す北朝鮮に對し、最も強硬論の米國を始め、國連安全保障理事會各國は、今月十二日更に苛酷の制裁を滿場一致決議するも、三日後には彈道彈發射し、米領グアムへの到達可能を誇示す。兩國首腦の舌戰險惡化し、容易ならざる國際情勢とはなりぬ。

この事態我が記憶を呼び起こせり。一はA B C D包圍による我が國への經濟封鎖にして、過ぐる昭和十六年十一月、日米の交渉暗礁に乗り上げ、同二十六日には謂はゆるハルノートの提示となり、その對應には今日なほ議論のある所にして、當時國民學校四年生の克く論ずる所に非ざるも、七十年後の今日この頃、十二日後の開戦はなほ早きに失したるかの感想あり。金正恩氏は之を學習せるものの如く、核開發の進展を誇示し以て保有國としての國際的地歩の確保に進まんとする意思あるに見ゆ。

されどその核保有こそは我が國の斷然沮止すべき課題なるに、我が國論は必ずしも統一せられず、徒らに昏迷の感あるを憂ふれ。唯一の被曝國として國連の核兵器禁止條約に、「米國の核の傘」の下にあるゆゑをもて、参加せざるを責むる一方、北朝鮮の核開發それ自體を責むるの言論意外に少し。かつての「原水禁」と「原水協」の對立、今日の「壓力」と「對話」の對立となれるは我が第二の記憶なり。

世に分斷征服(divide & conquer)なる手法あり、植民地の原住民部族を互ひに争はしめて、宗主國の利を計るに用ゐられ、アンデルセンは「裸の王様」にて、惡徳の裁縫師に空の衣裳をば「この衣裳の美しさの見えぬ輩は愚か者なり」と言はせ、「裸と見る」正統派と、「美しと見る」便乗派との一對九十九の分割に成功せしむるを以て、夙にその邪惡性を剔抉す。これその後一種の世論誘導に惡用せらるゝに至り、戦後の我が國にてもその例多し(特に選挙に於ける單純標語)。今回の「壓力」と「對話」も夫々を組合せてこそ効果も有らむに、とかく前者を戦争待望者、後者を平和主義者と命名分斷し、國論を誤らせむとする意圖見ゆ。

視點を變へて北朝鮮の國情を見るに、經濟狀態必ずしも順調ならずとの觀察ある中に、核兵器開發の速度尋常に非ず。元々核を扱ふだに高度の工業基盤を要する上、その兵器開發に攜はる優れたる人的能力の集團を要す。海外留學の技術者之を可能とせりとの報道に彼等の愛國的海外勉學の眞劍さを垣間見る。

一方我が國の科學界毎年の如く邦人のノーベル賞ありと雖も、受賞者の多くこの儘にては將來はノーベル賞は愚か、科學立國は絶望なりと警鐘を鳴らす。その理由の一つに科學研究者日常雜事に追はれ、研究に割く時間激減すと云々。管見ながら今日の電腦利用環境にては最近流行の携帶端末を謂はゆるホルター心電圖竝みに用ゐなば、研究機關全員の日々の行動分析など、簡単に實行可能なれば、問題はかなり絞込まれ改善可能ならずや。寧ろ問題は研究者の現在、受賞者の過去に比し、改善努力すべき點の指摘、三十年後ノーベル賞の可能性ありやなど、研究の質こそ問はれぬ。

(平成二十九年十月九日受附)

